

西ネグロス州バナゴ村の子どもたち

社会学部 1年 Y. H.

1. はじめに

私がフィリピン・エクスポージャー・プログラムに参加した理由は、同国の子供たちの暮らしぶりについて詳しく知りたかったからだ。昨年の夏に、三日間のスタディーツアーで、孤児院の子供達と交流したり、ゴミ集積所（ケソン市パヤタス）の一角に住む家庭を訪問したりした時に、子供達の実際の生活や孤児院で暮らしていくということ、子供達の将来などに関心をもったのである。そのスタディーツアーは、子供たちとの文化交流が主な目的であり、また、短期間滞在だったためか、深く学ぶことができなかった。なぜ貧困が改善されないのか、どのように貧困なのかなどというところまでは知ることができなかったのである。そのため、今回のエクスポージャー・プログラムで、ホームステイを通してその地域の暮らしを実体験し、インタビューを通してより詳しく子供達の暮らしを学んでいきたいと強く思った。また、社会福祉を専攻している私は、将来、日本にとどまらず、世界で生活に困っている子供達を支援できるような活動をしていきたいと考えている。そのため、今回のプログラムに参加することはとても意義あるものであると考えた。

現地へ行く前の事前学習において、同国では、出稼ぎに行く人がとても多いことを知った。求人が少ないので、たとえ有名大学を卒業できたとしても正規雇用の職を得ることは難しいという。そのため、ある程度の収入を得られる働き口を求めて、フィリピン国外に出稼ぎをして、送金することによって家族を養っていく。このことから私は、大学までの教育を受けることが難しい貧困層ほど出稼ぎをするのだろうと、出稼ぎにマイナスなイメージを持っていた。ところが、実際にフィリピンへ行ってみると、異なる現実が見えてきた。

2. 西ネグロス州バコロド市バナゴ村での暮らし

バナゴ村の特徴

バナゴ村は、バコロド市中心街から車で約 30 分のところにある小さな漁村である。集落には竹でできた家が密集し、人一人がようやく通れるほどの細くて迷路のような道が複雑に張り巡らされていた。上下水道設備がないため、道の両脇には汚水が流れ、異臭を放っていた。村の中心に井戸が一つあり、村人はそこまで来て水を汲んでいた。私たちの滞在をサポートしてくれた地域のリーダー的存在のナナイ（フィリピン語で母という意味）に村を案内してもらい、近くの海まで行ったとき、私は海を見て本当に驚いた。海の色が黒いのだ。墨を溶かしたような真っ黒な海で、水面にはさまざまなものも浮いていた。下水道設備がないために、生活排水や排泄物などがそのまま流れ込んでいるからである。濁った海の中で、3 歳ぐらいの女の子がたった一人で遊んでいる光景も見た。海の近くには竹でできた橋があって、慎重に進んでいくと段々と海の方に近づいていき、さらに奥まで進んでいくと海の上に建っている家に着いた。そこにある家は高床式倉庫のような造りで、下を見ると真っ黒な海水が波打っていた。その家の中で、子供たちがナイフを片手に貝の殻剥きをしていた。山のように積まれている貝を一つ一つ手にとり、ひたすらナイフで殻を剥いていく。その子供たちは毎日朝早くに学校へ行き、帰宅したら家の手伝いとしてその日の殻剥きがすべて終わるまでその作業をひたすら続けるという。

子供たちの作業からもわかるように、バナゴ村は漁業を生業としている人びとが住む地域であるが、ほとんどの人は漁に出るのではなく殻剥きをしてなんとか暮らしている。つまり、漁に出られるだけの船も道具も持っていないため、ナイフを片手に貝の殻を剥くことしかできない状況にあるということである。村を歩いていても、家族みんなで山積みになった貝を囲んでひたすら剥いている光景をよく見た。その家族は皆、よれよれの T シャ

ツを着ていて、やせ細っていたり、逆に栄養失調のためかお腹がぼっこりと出ている子供もいた。その様子から、貝の殻を剥いているだけでは、十分な収入を得られないのだということがよく読み取れた。実際のインタビューからも、一日三食食べられない家庭がほとんどであった。

多くの世帯の構成は 6 人から 10 人で、ほとんどの世帯は村内での貝の殻剥きに携わっていた。貝の殻剥きの仕事は、労働時間制ではなく裁量労働制であるため、月曜日から土曜日まで、朝の 7 時から作業が終わるまで（基本的には 16 時）、休憩する暇もなくひたすら殻を剥く。しかし、剥き身の価格は、1 コート（約 2.5 リットル）4 ペソ（約 9 円/2016 年 4 月 16 日現在）ととても安いので、家族みんなで一日中一生懸命働いても、およそ 20 から 30 ペソ（5~7 コート分）の収入にしかならない。この日収と同国全体の一世帯あたりの漁業分野平均日収 168 ペソ¹を比較すると、非常に少ないことがわかる。この日収で家族 6 人が生活するので、一人当たりわずか 5 ペソという計算になる。主食である米の価格は安くても 1 キログラム当たり 40 ペソなので、一日に 1 キログラムの米を買うことさえできない。この収入の低さが、一日三食食べられない現状を生んでいる。ある家族は、貝の殻剥きの仕事しかできなくて、一日にパン 2 枚しか買えないので、子供の食べ物を優先し、親は一日何も食べないことがほとんどであると言っていた。だが、優先された子供さえ十分に食べられるわけではなく、栄養失調なのか、お腹がふくれていた。また、別の家庭のある男の子は、家では自分の食料が不十分であるため、一日の食事は学校で支給される昼食一回だけであると言っていた。こんなにも日収が少ないうえに、雨が降ったり、貝の収穫量が少ない時期には、仕事量が減る。時には収入がない時さえあるという。そのため、貝の殻剥きの仕事だけではなく、鉄くずを集めたり、水を運んだりと他の仕事もやっている人が多い。

世帯によっては、父親がトライシクル（オートバイに乗客用のスペースを設けた乗り物）の運転手として一日 200 ペソの収入を得ている家庭もある。しかし、そもそもトライシクルの運転手をするために必要なオートバイや燃料を買う現金を持っていないため、ほとんどの世帯ではトライシクルを仕事にすることが難しい。また貝を獲りに行ったり、この不当な賃金を訴えたくても、船を購入する元手はないし、抗議すれば仕事を失うかもしれないという恐怖から、貝の殻剥きをしていた貧困層の人々は何も行動することができない状況にある。

また、現金を十分に持っていないため、病院に行くこともできない。風邪をひいたぐらいでは病院に行かないという。インタビューした 9 人の子供を持つ母親は、風邪などひいたことはないと言っていた。多分、風邪をひいても、そのことに気づかないまま過ごしているのであろう。もし怪我をしたとしても、受診できないので、ただ治るのを待つしかできない。

実際にインタビューしていく中で、出会った子どもは、片親の家庭の子が多かった。なぜ片方の親を亡くしてしまったか理由を聞いてみると、ほとんどの亡くなった親の死因は、高血圧や肺炎、結核などであると言っていた。日本であったら、内服すれば悪化を防いだり、治療したりできる病気であるにも関わらず、病院まで行く交通費がなかったり、無料で診察してもらっても、薬を買ったり生活を見直したりすることができないため、命を失う結果となってしまうのだという。そして、家族の一人が亡くなったことによって、稼ぎ手が減り、更なる貧困に陥るといふ負の連鎖が生まれていた。

子供の暮らし

このような貧困の負の連鎖が原因で、子供達に多くの影響をもたらしている。まず、経

¹ Philippines Information <http://www.in-philippines.com/average-wages-in-philippines-2014/> (2016/5/15 アクセス)

経済的な理由で、教育を受けられない子供が多かった。フィリピンの公立学校の授業料は無料だが、制服や文房具といった必需品は自己負担なので、結局費用がかかってしまう。貝の殻剥きの収入では生活していくにも苦しいのに、学校用品に使えるだけの経済的な余裕はないという。また、親自身が教育を受けられなかったために、収入の安定した仕事に就けず、かつ、教育の必要性を理解していないことから、自分の子供を無理してまで学校に行かせなくてもいいという意見を持つ人もいた。さらには、子供は大切な労働力であるという理由から、子供が学校に行くことに反対している親にも出会った。

フィリピンには子供の人権を守るための法律があり、子供の人権を守る NGO もある。しかし、インタビューをすることによって、実際に法律や機関などはあまり役立っておらず、親の就職格差が原因で子供の人権は侵害されていることがわかった。たとえ学校へ行くことができて、朝早く行って、帰ってきたらすぐに仕事をしているケースがほとんどであり、毎日通学できる子供はとても少ないことが分かった。

実際に私は、バナゴ村にあるバナゴ小学校に行って教員の話聞いた。同小学校には、1年生から6年生までの2171名が通っており、併設されている幼稚園には250人の子供が通っている。ほとんどの生徒が貧困の状況にあり、経済的な理由で中退してしまう。

そして、その小学校に通う12歳から17歳の裕福な家庭の女子生徒4人と貧困層の男子生徒4人にインタビューすることができた。

裕福な女子生徒たちの特徴としては、家族の誰かしらが海外やバナゴ村以外の場所で仕事をしているということである。また、彼女らは成績優秀者として表彰され、学校の入り口に写真が貼られているほどであった。

ジェーンという12歳の女子生徒は、2人姉妹である。母親が教師をやっているため、月収が20,000ペソであるという。

また、マリーという13歳の女子生徒は、3人兄妹である。父は漁業に携わり、日収が2,000ペソあり、船員として海外出稼ぎしている兄からは月10,000ペソの送金があるという。裕福な家庭で暮らす4人の女子生徒は毎日3回きちんと食事を摂り、学校から帰宅後もものんびりと過ごし、今まで辛かったことは何もないと話していた。

他方、貧困層の男子生徒たちは、労働力として少しでも家計を助けるために、早朝から学校へ行き、帰宅後はすぐに鉄くず集め（一日10ペソ）や水運び（一日20ペソ）といった仕事をし、夕飯を食べることもできないまま眠りにつくという暮らしを送っていると話してくれた。彼らの家庭の日収は平均250ペソであった。デニルという13歳の男子生徒は、6人兄弟である。両親は離婚し、父はすでに別の家庭を持っている。母は子供たちを置いて出ていき、祖母が彼らの世話をしている。しかし、経済的な理由から、兄弟全員と一緒に暮らすことはできない。デニルの兄たちは、他の町でなんとか暮らしているというが、今兄たちがどのような暮らしをしているかは分からない。

彼の家の日収は全て合わせても250ペソのみで、前述の女子生徒と比べると、半分以下ととても少ない。彼は放課後、金属の切り屑を集め続けているが、どんなに頑張った日でも、1日10ペソの収入しか得ることができない。時には学校へ行くことができず、一日中金属の切り屑を集めなければならない日もあるという。彼にとって、学校の給食が唯一の食事であり、まれに摂れる朝食も一杯1ペソのコーヒーのみ。父親がたまに訪問してくるときだけが幸せな時間であり、「僕のお父さんは他の家庭を持っているし、離れて暮らしているけれど、僕にとってのお父さんはお父さんだけなんだよ。」と話していた。反対に、彼が一番辛かったことは、母親が彼らを置いて出ていってしまったことであるという。彼はそんな母親をずっと憎み続け、今もなおそのときの悲しみが忘れられず、インタビュー中に泣き出してしまった。インタビューを行なっている私もいたたまれない気持ちになって涙を流してしまった。

また、リハードという17歳の男子生徒は、5人兄弟であるが、経済的な理由から5人のうち3人しか学校に行くことができない。彼の父親は病気で亡くなってしまったため、母親が洗濯で得る250ペソの日当だけで生活している。そのため、学校での昼食を含め、1日

2 回しか食事を摂れない。今までで一番辛かったことは、やはり父親の死であると言っていた。治療費を十分に持っていなかったために、病院には行かれても、治療を受けさせることはできなかったという。それに対して、一番幸せなことは、家族みんなで同じ家に暮らしていることだと言っていた。

このインタビューを通して、私の出稼ぎへのイメージがガラリと変わった。なぜなら、貧困で苦しんでいる子供の家庭からは、そもそも出稼ぎすることが困難だからである。安定した収入を得たくても、教育も受けられていないため知識がないし、まず都市まで行く現金も持っていない。だから、住んでいる場所にとどまって、辛い生活を送らざるを得ないのである。

3. 貧困から脱却するための取り組み

一見、子供達が楽しく暮らしているように見えるバナゴ村を詳しく見てみると、様々な問題（＝暴力）があり、それらの問題も複雑に混在していることがわかる。ではほとんどの問題の原因とも言える貧困から脱却するために、町の人々は何か自分で行動を起こしているのだろうか。インタビューしたある老夫婦は、娘が置き去りにしていった孫を育てるために、やせ細った身体で毎日朝から晩まで休むことなく貝の殻剥きをしていた。なんとか子供達を育て、貧困から必死に脱却しようと努力している一つの取り組みであると考えられる。

また、子供達の働く姿にも同じことが言える。たとえ賃金が低くても、少しでも多くの収入を得るために、学校よりも労働を優先し炎天下の中必死に働いているこの行動も、子供の権利の獲得や法律上の最低賃金すら守られない状況を改革することにはつながらないかもしれないが、自力更生努力の一つであると言える。

4. 取り組みがうまくいかないわけ

なぜ朝から晩まで必死に働いているにも関わらず、いつまでも貧困状態のままなのだろうか。理由の一つとして、前にも述べた通り、労働条件に問題があるからである。まず、貝の殻剥きの仕事の賃金が低すぎるのが一番の問題である。一日中黙々と一生懸命働いているにも関わらず、なぜ日収 50 ペソだけなのか。実際、町の人たちも低賃金に不満を持っているが、「抗議したら仕事を失うかもしれない」という不安から、自分たちの意見を発することは困難で、どうしようもないことだと思ひこんでいる人も多かった。ここに言論の自由がないという問題がある。

また、完全な労働裁量制であることも問題である。もし、時間給であれば、貝の収穫量や天気によって左右されすぎず、少なくとも今より安定した収入を得ることができる。それによって少しだけでも生活が豊かになるかもしれないし、人々の仕事に対する気持ちも変わってくるだろう。

また、小学校の授業料は無料だが、結局、ノートや制服といった学校用品に多くの現金が必要になる。そのため、親が、悪条件の中どんなに必死に働いたとしても、制服代すら支払えずに入学できないという現状がある。こうして、子供は教育を受けることができず知識が身につかないため、貝の殻剥きの仕事をせざるを得ず、将来、その子供の子供にも教育を受けさせることができないという負の連鎖が起きている。

また上記のような連鎖によって、実際にストリートチルドレンが生まれている。経済的な苦しさは、親から子への暴力につながることもある。実際にインタビュー時のバナゴ村の人の話によると、日常的に暴力を受けている子供は表に見えていないだけで多いという。ホームステイした家の近所の子どもの一人であるジェームという7歳の男の子は、母親の経済的に苦しい生活を強いられているストレスのはけ口として、身体的暴力を受けており、時にはベルトを鞭のようにして叩かれる事もあると話していた。

そして、両親からの暴力に耐えられなくなった子供が、その状況からなんとか逃れるために路上での生活を選ぶ。これがストリートチルドレンとなるきっかけである。

今回のエクスポージャーで、ストリートチルドレン 6 人の集団にインタビューすることができた。彼らはみんな、遠くにある自分の家からここにやってきて暮らしていた。経済的な理由や家庭的な理由から自分の家族とは暮らせないため、親元を離れてなんとかここで暮らし、現金が貯まり次第親の元へ帰るといった生活をしている子もいた。両親と繋がりはあるが、一緒に暮らせない子供がほとんどだった。6 人の子供たちは木の下で眠り、一日中お金を稼ぎながら 6 人で生活しているという。ジプニー（ワゴン車などを改造した乗り合いの車）を洗ったり（一日多くて 20 ペソ）、寝起きしている場所の近くにあるラサール大学に通う韓国人や日本人の学生に物乞いをしたりしてなんとか生活している。しかし、一日の収入は多くても 50 ペソなので、6 人のお腹を満たすことはできない。また、濁った川での水浴びが入浴の代わりであるため、彼らの体は土や砂などで汚れていた。

インタビューする前の私のストリートチルドレンに対する印象は、家族や親と全く関係がなくなり孤独になってしまった故に路上で生活しているというものであった。そのため、親との繋がりをもちながらも、路上で生活するというのに驚いた。しかし、中には両親に捨てられて、頼る当てなくここに來たと話してくれた子供もいた。インタビューした 6 人のうち 3 人が小学校へ行くことができているが、中には中退してしまった子供もいる。彼らの夢について聞いてみたが、みんな「毎日過ごしていくのが精一杯で夢はない」と答えた。このように、貧困が原因で、夢を持つことさえ難しい状況があるということも分かった。

5. 周囲との関わり

このような状況の中で、子供たちは何か周りからの支援を受けているのであろうか。

学校でインタビューから、デニルとリハードのケースを例に挙げたい。両家族とも一日 250 ペソでは最低限度の生活が成り立たないため、政府の Pantawid Pamilyang Pilipino Program²（以下、4Ps）という支援制度のもと、3 ヶ月に 1 度一人 800 から 1000 ペソの経済的支援を受けている。しかし、4Ps は、通学している子供に対しての支援制度であるため、そもそも学校に行くことができないほど困窮している家庭の子供は、制度の対象にならない。実際に、リハードの兄弟は 5 人のうち 3 人しか学校へ行くことができないため、4Ps の受益者も 3 人だけである。ストリートチルドレンは家庭の一員ではないので、支援を受けられないと話していた。

また、85 パーセント以上の出席日数が 4Ps の受給要件の一つであるため、その条件を守れなくなった瞬間に制度が受けられなくなってしまう。親の仕事の手伝いをしている子どもは、毎日通学できないため、受給要件を満たせないことがほとんどであるし、途中で学校を中退せざるを得ない子どもは、中退した瞬間から支援制度も中止される。

このように、結局、政府からの支援を受けられる子供は、学校へ行かれる、比較的恵まれた子供であるとみることができる。もっとも支援が必要だと想定される、食べるために働かざるを得ない子供は支援を受けられていないことがわかった。

6. 人々とわたし

今回、実際に現地でホームステイをしながら、現地の人にインタビューすることによって、子供達の暮らしの実態や沢山の問題が複雑に混在していることが分かった。学校に通えず、ずっとその場所で貝の殻剥きをして、十分に食べられる幸せもないまま生涯を終えていく。なぜそのような貧困から脱却することができないのか。インタビューを通して、彼ら自身が、その状況に、ある程度「貧しいからしょうがない」「もうどうにもできない」と自分たちを卑下し、割り切って“諦めている”ように感じた。仕事を始めたくても、お店を開きたくても、それを始めるだけの元手を持っていない。だからと言って、周

² Pantawid Pamilyang Pilipino Program <http://pantawid.dswd.gov.ph> (2016/5/15 アクセス)

りから十分な支援を受けることができるわけでもない。このようなことから、自分の暮らしをよりよくしようと思っても心のどこかで諦めてしまっているのである。

そして、本当は様々な暴力を受けながら生活しているのにも関わらず、「私にはこの生活が当たり前」というように、そもそも今の状況が自分自身にとっては普通と感じているため、問題を解決するための行動を起こせないのである。

また、たとえ教育を受けられていなくても、憲法がきちんと保障されていれば、毎日三食食べられるぐらいの生活は送れるはずである。それすらできないのは、制度がまだまだ不十分であり、機能していない状況があるからだということがわかった。

フィリピンには問題が溢れていた。しかし実際には、それを多くの人が見て見ぬ振りをしているために、いつまでも解決策は出てこない。苦しい思いをしている人はその状況の中で生きるのに必死で、声をあげる余裕もなく、訴えるのを諦めてしまっていることがとてもよくわかった。

暴力を減らすために、私たちが一番にすべきことは、「気づいてもらう」「自覚してもらう」ことである。外からの意見を入れることによって、その辛い生活の中で必死に生きていくことが解決策ではなく、そのような状況の中で暮らしていることに問題があり、そのような暮らしから脱却することこそが貧困からの解決方法であることを知ってもらうことが大切である。そしてその人たち自身が問題意識を持ち、行動していくことがより良い暮らしをしていける解決策につながると思う。

そのためには、私たちが現地の方々に問題意識を持ってもらえるような活動を続けていくことが大切である。インタビューすることによって、私たちの新しい知識になると同時に、インタビューされる側も、自分の状況を見つめ直す機会になるかもしれない。そして、私たちと会話することによって、自分自身の人権が脅かされているということを自覚し、より良い暮らしを求めるきっかけとなる可能性もある。そして私たちも、インタビューで得た情報をフィリピンの政府だけでなく、日本に広めていく必要があると思う。まずは、一人でも多くの人に、こんなに厳しい生活をしている人がいることを知ってもらうことから始めて、この活動の輪を広げていくことが大切である。

インタビューに応じてくれた全ての方々は、急に他の国から来た、見ず知らずの私たちに、暮らしや人生を隠さずに語ってくれた。辛いことも苦しいことも、親に治療を受けさせることができなかった悔しい思い出も、泣きながら話してくれた。その方々の勇気や協力を絶対に無駄にしてはならない。そのためには、この一回だけのエクスポージャー・プログラムで終わらせるのではなく、その人たちの暮らしが改善できるまで、本当に支援が必要な人が支援を確実に受けられる日まで、引き続き私たち第三者が介入していく必要があると思う。

今回のエクスポージャー・プログラムでは、フィリピンの人々を取り巻く貧困と私自身の関係性について深く見いだすことができなかった。だから、今後の課題として、私自身が彼らを取り巻く状況のどこに位置するのかを発見し、自分自身が具体的に何をすべきなのかを明確にしていきたい。